

日本介護福祉学会通信

No. 80



2023年7月発行

発行：日本介護福祉学会 The Japanese Association of Research on Care and Welfare
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 (株) 国際文献社内

第31回日本介護福祉学会大会について

第31回日本介護福祉学会大会の開催にあたって

第31回日本介護福祉学会大会
大阪人間科学大学 人間科学部
社会福祉学科 学科長 大野まどか



2023年度、第31回日本介護福祉学会大会を開催するにあたり、歓迎のご挨拶とご案内を申し上げます。

2020年から続く新型コロナウイルスは、介護福祉や医療、保健の領域において多様な影響を与えましたが、そのような中でも第一線で支援の必要な人に寄り添い、支えられている皆様に心より敬意を表します。

新型コロナウイルスに対する考え方や対応は新たな局面を迎えていますが、第31回大会を企画するにあたり、当初より前大会と同様に非対面型(オンライン)開催を前提に進めてまいりました。非対面型(オンライン)で開催することによって、全国からご参加頂けることと存じます。

大会テーマは「持続可能な社会にむけた介護福祉の挑戦ーテクノロジーの活用」です。コロナ禍において、テクノロジーは加速し、介護の在り方に少なからず影響を与えています。本大会においては、「介護福祉」と「テクノロジー」を掛け合わせ、結びつけることによって、誰もがその人らしく、自立した生活を営むことができるように新たな介護福祉の可能性と介護福祉が持続可能な社会に向けて何をすべきかを考えます。現在のテクノロジーの到達点、介護福祉実践におけるICTの活用の実際、ICTに関する人材の育成などについて、講演やシンポジウム、研究発表、近畿地区公開講座とコラボレーションした企画などを通して知見を深める機会となることを願っております。

学会員の皆様はもちろんのこと、介護現場で活躍される皆様、介護の未来を担う学生の皆様のご参加もお待ち申し上げます。皆様と共に持続可能な社会に向けて、テクノロジーを活用した介護の未来を考え、議論する場として、第31回大会が有意義な大会となりますことを心より祈念申し上げます。

開催にあたりまして、後援諸団体様、薫英学園様、日本介護福祉学会会長をはじめ、学会理事会・事務局の皆様、ご参加・ご協力頂きました全ての皆様のご支援に熱く御礼申し上げます。

第31回日本介護福祉学会大会 開催概要

大会テーマ 持続可能な社会に向けた介護福祉の挑戦ーテクノロジーの活用

大会日時 2023年9月10日(日)9:00~18:00

会場 オンライン(Zoom)での開催予定
※近畿地区公開講座は一般の方にも公開します。

主催 第31回日本介護福祉学会大会実行委員会

共催 2023年度近畿地区公開講座

後援 大阪府、大阪市、摂津市、社会福祉法人大阪府社会福祉協議会、社会福祉法人大阪府社会福祉協議会老人施設部会、社会福祉法人摂津市社会福祉協議会、公益社団法人大阪介護老人保健施設協会、摂津市介護保険事業者連絡会、公益社団法人大阪社会福祉士会、一般社団法人大阪精神保健福祉士協会、公益社団法人大阪介護福祉士会、大阪介護福祉士養成施設連絡協議会、介護福祉士養成大学連絡協議会、一般社団法人シルバーサービス振興会、作業療法と生活リスクコミュニケーション学会、中央法規出版株式会社

【第31回日本介護福祉学会大会 実行委員会】

大会長	大野 まどか (大阪人間科学大学)
実行委員長	武田 卓也 (大阪人間科学大学)
実行委員	浅野 幸子 (大阪介護福祉士会・会長)
	新井 康友 (佛教大学)
	川井 太加子 (桃山学院大学)
	玉井 美香 (大阪人間科学大学)
	時本 ゆかり (大阪人間科学大学)
	水谷 真弓 (大阪人間科学大学)
事務局長	杉原 久仁子 (桃山学院大学)
大会事務局	大阪人間科学大学 人間科学部 社会福祉学科

大会プログラム(予定)

9月10日(日)	
8:45～	受付開始・入室可能
9:00～	開会式
9:30～10:30	<p>基調講演</p> <p>ムーンショットプロジェクトと共創研究による自立支援の革新 —テクノロジー活用とICT人材育成の視点から—</p> <p>東北大学大学院 工学研究科 ロボティクス専攻 教授 平田 泰久 氏</p>
10:35～12:05	<p>日本介護福祉学会 近畿地区公開講座企画</p> <p>「作業療法の視点から考える介護事故軽減への挑戦」 作業療法士による転倒事故を防ぐリハビリ的視点</p> <p>大阪人間科学大学 保健医療学部 作業療法学科 講師 木下 亮平 氏</p> <p>時間的制約を利用した事故予測対策(TP-KYT)の紹介</p> <p>関西福祉科学大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 准教授 有久 勝彦 氏</p>
12:10～13:10	<p>ランチョンセミナー</p> <p>エビデンスに基づく介護実践を目指す取り組み —眠りSCANを活用した施設と大学との協働—</p> <p>社会福祉法人陽光福祉会 特別養護老人ホーム エコーが丘 施設長 高田 洋樹 氏</p> <p>仙台大学 体育学部 健康福祉学科 学科長 堀江 竜弥 氏</p> <p>コーディネーター:水谷 なおみ 氏(日本福祉大学)</p>
13:20～15:20	自由研究発表
15:30～16:50	<p>シンポジウム「テクノロジーを融合した介護福祉の深化に挑む」</p> <p>浅野 幸子 氏(大阪介護福祉士会 会長)</p> <p>尾形 成美 氏(マッスル株式会社 ヘルスケア部 部長)</p> <p>加藤 正人 氏(社会福祉法人隆生福祉会 経営管理統括部 統括部長)</p> <p>福元 正伸 氏(兵庫県立福祉のまちづくり研究所 主任)</p> <p>コーディネーター:時本 ゆかり 氏(大阪人間科学大学)</p>
17:00～17:50	総会・学会賞授賞式
17:50～18:00	閉会式

第31回日本介護福祉学会大会 参加申し込みについて

- 1 大会日時： 2023年9月10日(日) 9:00～18:00
- 2 会 場： オンライン(ウェビナー、Zoomでの開催)
- 3 参加申込期間： 2023年5月10日(水)～ 8月31日(木)
※参加申込みされた方のみ参加可能です。
- 4 大会参加費： 会 員 一人3,000円
非会員 一人4,000円
学生・大学院生 一人1,000円

※自由研究発表にエントリーできるのは、学会員で大会参加費を納入する者に限ります。

※学生・大学院生として大会に参加する場合は、お申込み時に学生証の写真添付が必要になります。

※支払い後の返金には応じられませんので予めご了承ください。

5 お申込み方法：

以下の日本介護福祉学会ホームページから第31回日本介護福祉学会大会特設ホームページに入り、参加申込をお願いします。また、直接申込に進みたい方は参加申込のアドレスからも申込ができます。

日本介護福祉学会HP： <https://jarcw.jp/convention/congress/>

参加申込登録： <https://iap-jp.org/jarcw/conf/>

皆様にお会いできることを楽しみにしております。

連載企画 「私と介護」(4)

関わりの中からの学び、伝え残したいこと

白井 孝子

日本介護福祉学会理事

(学校法人滋慶学園 東京福祉専門学校 副学校長)



—岩手県盛岡市出身。

看護専門学校卒業後、・聖路加国際病院、労働省(現厚生労働省)診療所勤務。小児病棟での終末期看護のあり方から在宅看護に興味を持つ。

訪問看護業務に携わる中で、生活支援には保健医療福祉の連携が重要であることを体験する。その思いを形にするため、介護福祉士養成に関わるようになる。

○はじめに

私は、1990(平成2)年4月から現在の職場と関わるようになりました。開校したのが1989(平成元)年ですから、早いものでもう30年以上、介護福祉士養成に関わってきたこととなります。

今回「私と介護」というテーマでというお話をいただき、皆様は何をお伝えするのが良いか、色々考え迷いました。そして、自分の半生を振り返りつつ、そこでの関りから学んだこと、伝え残したいこととして、4つの場面からお伝えしたいと思います。まず、「なぜ看護師になったのか」という自分のルーツ。次に「介護とのかかわり」昔の介護現場での思い出。3つ目に「思いを実現する」関わった人たちから学んだこと。

最後に「伝え残したいこと」介護福祉士の皆様へとなっています。人生の思い出話を聞くような気持ちで読んでいただければ幸いです。

○なぜ看護師になったのか

私は、岩手県盛岡市で生まれ育ちました。看護師になったきっかけは、ある人の言葉でした。高校3年生の終わり頃、春からは新たな土地で学生生活が始まる目のことでした。当時、入寮予定の寮管理者の言葉がどうしても納得できず「あの学校には行かない」と両親に宣言しました。その管理者の言葉というのは「近くには〇〇大学の寮がありますからね、うちの寮は良縁に恵まれますよ。」というものでした。

私に高い志があったわけではありませんが、「良縁とはなに、そんな事考えていないし」と反感からの進路変更でした。今から何ができるか考えた時に、部活の先輩から聞いていたのが看護の仕事でした。「そうだ看護師になろう。働き続けることのできる職業だ。」という結論をだしました。

しかし、今とは異なり看護師は3K職場と呼ばれており、両親は私の選択に難色を示しました。反対されると余計燃える性格だったのだと思いますが、無事

看護学校に入学する事ができました。あの管理者の言葉がなかったら、私は看護師にはなっていませんでした。選択に悔いはなかったと思っています。

○介護とのかかわり

私は看護学生時代の実習を私立大学医学部の付属病院で行いました。当時は、急性期の医療活動が主でした。ベッド確保の都合で、昨日まで安静と言われていた患者さんが「今日退院していいですよ」といわれ、本人や家族が呆然とする、そのような状態が当たり前のように繰り返されていました。その中で、約1か月間特別養護老人ホームでの実習がありました。市内とはいえ山の中腹にある施設は、近代的な外観とは異なり、男性も女性も刈り上げ頭で、生活支援内容は画一的なものでした。「利用者が散歩したいというので、行きたいのですが」と聞くと「ダメ、あなたたちがいなくなったら、私たちできないから」と返される。そんな日々の繰り返しでした。「この施設に自分の親を入れたくないね」と友人と話しながら実習をしていました。私が介護の必要な高齢者と関わる初めての体験は、良いものではありませんでした。しかし、当時の主役は医療職や介護従事者であり、患者や利用者の思いを聞く、考えるという時代ではありませんでした。そしてそのことを、仕方ないと思う私がいたのも事実でした。

○思いを実現する

看護師としての生活は東京の総合病院の小児病棟で開始されました。医療主役の病院での実習に慣れていた私は、そこでの先輩看護師や医師たちの活動に、目が点になり、そして看護とは何か医療とは何かを考えさせられ、再教育された時代でもありました。ある時、白血病で余命が限られた女の子が私に聞きました「ねえ、病院っておかしい所だと思わない。あれはダメ、これはダメ。家にいたらできることが全てダメ、おかしいでしょう？」と、その時の私は「そうだね、でも病院だから仕方ないよね」というものでした。

しかし先輩看護師や医師たちは違いました。その言葉を聞き、当時まだ一般的ではなかった在宅でのターミナルケア、彼女の家に戻りたいという思いを実現しました。死の数時間前、病院に戻ってきた彼女は「家は良かった。楽しかったよ」と私に教えてくれました。その言葉が彼女の最後の言葉となりました。この体験は、その人の思いを大事にする、それは幸せにつながることを実感しました。この体験を含め、人と関わる専門職として、自分は何をもとに考え行動するのか、繰り返し体験したことは、介護に関わった時に「これだ」と思えるものになりました。

○伝え、残したいこと

その後、在宅に興味を感じ、江戸川区内での訪問看護に携わりました。介護福祉士という資格制度が生まれる前です。関わる方々からは施設には入りたくない、自分らしい生活ができなくなるという言葉も聞きました。今、昭和、平成、令和と時代は変わり、社会情勢や背景は大きく変化しました。介護福祉士が、尊厳を守り自立支援する福祉の専門職であることを多くの人たちが知るようになりました。日本で介護を学び、母国に戻った方や海外で日本の介護を実践する方々は高い評価を得ているとも聞きます。これまでの教育は間違っていなかったと感じるところです。しかし、介護の専門性は何かと問われた時に、「それはこれだ」と明確にできない部分も残っているのも現状です。これからの介護福祉を発展させるためにも、介護福祉士の専門性を追求するためにも、現場での経験と、学問が融合する必要があります。そのためにも、現場で働く介護福祉士の方々一人ひとりの体験をまとめ多くの人に伝え、行っている介護を検証することを実践して欲しいと思っています。そのためにも、職能団体である日本介護福祉士会と連携している本学会は中心的役割を担ってゆくのだと確信しています。介護福祉士のこれからの活動を高め、発信してゆくためにも、日本介護福祉学会の周知を図り皆様とご一緒できれば嬉しいです。

日本介護福祉学会 「学会設立30周年記念」

日本介護福祉学会 学会設立30周年記念事業として、学会の軌跡、介護福祉学のあゆみを歴代会長から将来へのメッセージとして伝えること、また介護福祉学研究・教育・実践への発展などを目的に、この度、「学会設立記念 インタビュー対談」を学会ホームページで動画配信する企画をすすめています。

第一弾として、第4・5期会長 黒澤貞夫先生、第二弾は第6・7期会長 井上千津子先生をお迎えして介護福祉学会のミッション、介護福祉学構築へ向けてなどを伺っていきます。

日本介護福祉学会設立30周年記念企画プロジェクトチーム
上之園佳子、武田卓也、平下政美、午頭潤子 富田絢子、島崎 将臣

インタビュー対談ゲストのご紹介

第一弾 第4・5期会長 黒澤貞夫先生

本学会第4・5期会長、現在は名誉会員である黒澤貞夫先生の紹介をさせていただきます。

黒澤先生は、厚生省(現:厚生労働省)に入職し、障害者福祉および高齢者福祉の分野で60年以上の長きにわたり、福祉実践・福祉研究・福祉教育に携わって来られました。

国立塩原視力センターから始まり、東京視力センター、神戸視力センター、伊東重度障害者センター、国立身体障害者センターで目の不自由な人々、からだの不自由な人々、障害を有する人々とともに福祉実践をされて来られました。退職後、特別養護老人ホームでの施設長の経験もその後の福祉教育に重要な体験であったと先生は語っておられます。

日本介護福祉学は、1993年に創設され、第1期会長は故一番ヶ瀬康子先生です。一番ヶ瀬先生は、第3期まで会長を務められ本学会の基礎基盤を創られました。一番ヶ瀬先生からバトンを受け取った2003年から2009年までの第4期と第5期学会会長として黒澤先生は、本学会の発展に貢献されました。

黒澤先生は現在、本学会の名誉会員として学会活動や研究会などの講師を務めておられます。併せて、黒澤先生は、日本生活支援学会を立ち上げ、会長として“人々の生活保障を解決・軽減するための生活支援の学的体系を探求し、生活支援学として理論と実践の統合をめざす”ことを念頭に、生涯福祉研究を実践されています。

福祉教育として、岡山県立大学保健福祉学部教授、弘前福祉短期大学学長、浦和大学学長を歴任され、介護福祉士や社会福祉士養成に携わっておられました。介護教員講習会の講師として、介護福祉学、介護過程などの科目を担当され、養成教育に携わる教員の育成にも力を入れておられます。

今回は、これからの『介護福祉の未来を語る』と題し、これまでの福祉実践、福祉研究、福祉教育および本学会での活動を振り返っていただき、未来に向かって、介護福祉はどうしなければならないのか、先生から学ばせていただきたいと思います。(島崎将臣)

第二弾 第6・7期会長 井上千津子先生

本学会第6・7期の会長を務められ、現在名誉会員である井上千津子先生のご紹介をさせていただきます。

井上先生は、ご自身の18年間のホームヘルパーとしてのご経験をもって、介護という仕事の価値や魅力を広く示し、その社会的な立場の確立に貢献されてきました。社会にヘルパーの実態や問題点を知らしめ、高齢者問題への関心を高める一翼を担うこととなった著書「ヘルパー奮戦の記」は1981年に毎日出版文化賞を受賞し、映画「ヘルパー奮戦の記～お年寄りとともに～」としても文部大臣奨励賞を受賞されています。

また、井上先生はこれまでに東海大学健康科学部教授、金城大学社会福祉副学長、京都女子大学家政学部教授を務められ、4年制大学における介護福祉士養成教育にも尽力されてきました。その豊富な経験、確固とした介護観に基づいた教育によって、学生の人格形成の基礎を高めていく重要性、4年制大学で介護福祉を学ぶ価値について示唆されています。

本学会においては、初代会長である一番ヶ瀬康子先生らとともに、学会設立当初から関わっておられ、介護福祉の学問としての発展、介護福祉士という国家資格の価値や質の向上に大きく寄与されました。特記すべきは学会活動として「介護福祉学事典」(2014年出版)の編纂に取り組みされたことです。学会設立当初からの命題である「介護福祉学」構築の第一歩として、介護福祉に関する知識・技術の基礎的なエビデンスを明示しました。

福祉元年以前より介護の仕事に携わり、現在に至るまで介護福祉の世界を牽引されてきた井上先生は、日本における介護福祉の歴史、介護福祉学会の歩みを語る上で欠かせない存在であります。井上先生から、学会設立時のことや介護福祉教育などについてお話を伺える大変貴重な今回の機会を、今後の学会活動、介護福祉士の養成課程の発展につなげていきたいと思っております。(富田絢子)

学会設立30周年記念 インタビュー対談ゲストへの質問募集

インタビュー対談ゲストへの皆様からの質問を下記のGoogleフォームにて募集いたします。

<https://forms.gle/QJZh4wsTy7MUrA3k9>



素朴な疑問も大歓迎です。

上記のリンクまたはQRコードから、多くのご質問をいただけますと幸いです。

第一弾 黒澤貞夫先生への質問 締め切り 2023年8月31日

第二弾 井上千津子先生への質問 締め切り 2023年9月15日

ご記入いただきました全ての内容は学会設立30周年記念対談でのみ使用させていただきます。個人情報厳守します。頂いた質問やご要望は統計的に処理をさせていただき、インタビュー対談企画を実施する際に参考にさせていただきます。ご協力の程よろしくお願いたします。

配信がスタートした折には、学会ホームページ及び会員の皆様へ登録アドレスにURLをお送りさせていただきます。皆様どうぞお楽しみにお待ちください。

国際交流委員会企画(3)



国内外で介護や福祉分野の国際関係のお仕事を
されている方へのインタビュー企画第3弾！

国際交流委員会では、介護や福祉分野で、国際的に活躍している方へのインタビュー記事をシリーズでお届けしています！今回は第3回です！インタビューの内容を通して、少しでも海外を身近に感じてもらえたと思います。

今回のインタビューー ペグ ジョンウクさん
(韓国カトリックサンジ大学教授)
インタビュアー 綾部・古川(国際交流委員)

古川:本日はよろしくお願ひします。ペグ先生、自己紹介をお願いいたします。

ペグ:私は現在、韓国の安東市にある、カトリックサンジ大学で、社会福祉学科の教員として勤務しています。日々の学生指導のほかに、国際交流院長として、国際交流の責任者をしています。特に、国の助成金を獲得することで、学生の海外交流が活発になるので、その申請も、私の大切な仕事の一つです。

綾部:日本語が堪能ですが、日本に留学されていたのですか。

ペグ:30年近く前ですね。そのときの韓国は、今ほど留学は一般的ではなかったですね。私は、韓国の大学で学んでいたのですが、これからはグローバル時代で、海外で経験を積むことが重要だと考えて、日本に留学しました。

★なぜ留学先に日本を選んだのですか。

古川:韓国からですと、アメリカやヨーロッパへ留学する方が多いと聞いたことがあります。多くの留学先がある中で、なぜ日本を選んだのですか。

ペグ:今はそうですが、私が留学した時代は、日本に行く留学生が多かったんです。当時は、今以上に政治的な問題もあったのですが、私は日本のスタイルが好きだったんですね。例えば、日本人は、目標を定めて、その目標に向かってきっちり計画し、目標に向かって努力するじゃないですか。私はそういうスタイルが好きでした。もう一つは、一番近いところという理由もありました(笑)。アメリカは遠いじゃないですか(笑)。

綾部:私も院生時代、韓国からの留学生とルームシェアしていました。その留学生もそうでしたが、確かに当時、韓国の大学を卒業してから、日本の大学院で学んでいた方がいらっしゃいましたね。

ペグ:他には、父の影響も大きいです。私の父は中学校の校長だったんですね。いわゆる公務員ですから、そんなに豊かな家庭ではなかったんですね。そこで、「1年だけ日本に留学して、語学研修をして、その後は韓国の大学に戻ります」って約束したんですね。その1年間の間に、のちに修士課程の指導教員になる桜美林大学の教授と知り合ったんですね。その先生から、「これから韓国は高齢社会になるから、あなた



は高齢者福祉について、日本で学んでおくと良い」と教えていただきました。ちょうど日本では、介護保険が始まった頃だったんですね。私はその時から、「大学教員になりたい」という夢があったんですね。そこで、父にも説明して、日本の大学院で学ぶことを決心しました。

★日本での留学時代は順調だったのですか。

いいえ。苦労が多かったです。私は、大学院修士課程の入試に、1回失敗しているんです。その時はつらくて、韓国に戻って、韓国の大学で勉強しようと思ったんです。でも、父や、当時小学校の教員をしていた父の兄が、日本の大学院で学ぶことを強く勧めてくれたこともあり、もう一度、日本の大学院入試にチャレンジしようと決めました。

綾部：それで、日本で頑張ろうと思ったのですか。

ペグ：はい。それから、早稲田大学の近くにあった、大学院入試のための塾に行ったり、聴講生として桜美林大学で学んだりしました。そして、桜美林大学大学院の修士課程に入学しました。それから、大変なことはいっぱいありましたね。

綾部：大学院では、どのような研究をされたのですか。

ペグ：高齢者の咀嚼能力について研究しました。歯の問題に着目して、韓国と日本の比較研究を行ったんです。でも、大学院でも苦労が多かったです。例えば、「韓国と日本を比べて、どんな意味があるの」とか、

「韓国人はキムチ好きなのは当たり前でしょ？日本人は寿司好きなのは当たり前でしょ？なのに、咀嚼について、韓国と日本を比較することに、どんな意味があるの」なんて言われたこともありました。今考えたら、ひどい質問ですよ（笑）

★どうして日本で博士の学位を取得しようと思ったのですか。

綾部：修士の学位を取得した時点で韓国に戻るという選択肢もあったと思いますが、なぜ日本で博士課程に進学したのですか。

ペグ：韓国の大学教員は、当然ですが、全員修士の学位はもっています。そこで、私も、修士を取っただけで帰国したら、自分の特長がないなど考えたんです。そこで、苦労するのは承知の上で、日本で博士の学位を取得することにしました。それで、結局10年間、日本に住むことになったんです。

綾部：博士課程は、修士課程よりかなり難易度が上がると思いますが、そのあたりはどうでしたか。

ペグ：修士の時の経験があったので、それを土台にして頑張りました。博士論文は、まず全部ハングルで書きました。日本語で書くのはすごく難しいじゃないですか。統計処理なども最初はすべて韓国語で行いました。その後、日本語に翻訳して、何度も日本語の添削を受けました。そこがすごく大変でしたね。

★留学時代の思い出やエピソードがあればお聞かせください。

1時間では話しきれないほど、沢山の思い出がありますね。私は当時、早稲田大学の近くに住んでいたのですが、早稲田の学生と一緒に、コンビニでバイトしていたんです。他の国から来ている留学生も一緒にバイトしていました。そのコンビニでは、店長がいない時間になると、留学生たちはいい加減に仕事をするのですが、その早稲田の学生は、店長がいてもいなくても、同じように、しっかり真面目に働くんですね。その真面目に働く彼から大きな影響を受けました。その時のことは強く印象に残っていて、現在、教員として学生を指導する際にも、当時のことを思い出して指導しています。もう30年近く前のことですが、強く印象に残っているエピソードです。

☆日本との関わりや、今後のことについて教えてください。

ペグ:韓国は日本より8年遅く介護保険ができたんですね。

古川:老人長期療養保険ですかね、日本語にしたら。

ペグ:はい。日本とドイツを参考にして制度化したと言われていますが、私から見ると、日本の介護保険制度とそっくりなんです。でも、韓国はまだまだ不十分な点

が多いです。例えば、日本の介護福祉士のような制度がないんです。

古川:療養保護士という国家資格があると聞きました。

ペグ:それは、日本でのヘルパーのような感じですが、一応国家資格ですが、学ぶ時間も内容も不十分です。あとは、ケアマネジメントについても、課題があります。でも、少しずつ前進しています。

古川:どんな前進ですか。

ペグ:近々発表されますが、コミュニティケア、地域包括支援センターが2026年から始まります。

綾部:韓国ですか。

ペグ:はい。国としてのスタートは2026年ですが、2021年から、安東をはじめ、いくつかの地域ではモデル事業として行ってきたんです。これから韓国は、急速に高齢化が進みます。それに対応できる人材を育てることが、今の一番の使命だと考えています。そこで、古川先生にも協力してもらい、日本の社会福祉法人と協定を結びました。そして、サンジ大学の卒業生が日本に来て、介護福祉実践現場で働きながら高齢者福祉について学べるような道筋を作りました。日本で学んだサンジ大学の卒業生が、将来、韓国の高齢者福祉の中心になって活躍すると信じています。

古川:現在のペグ先生のようにですね(笑)

綾部:今日は本当にありがとうございました。

ペグ:こちらこそ、私も楽しい時間でした。



今回のインタビューの感想…

いつも明るく前向きなペグ先生ですが、今回、留学時代の苦労話などを伺い、新たな一面を知ることができました。日本と韓国が協力して、東アジアの介護福祉を発展させていきたいと思いました。

2023年度 海外の国際学会のご案内(9月以降開催分)のご案内



国際交流委員会からの海外の国際学会(2023年度9月以降開催分)のご案内です。
ハイブリッド型等オンライン開催だけでなく、対面型での学会も開催されてきています。
各学会のホームページも充実しており、事前にホームページをみたり、実際の参加や発表を通して、海外に少しでも目を向けたり、実際に参加等を通して参加者と交流を深めてみませんか。
(コロナ禍の状況のため、情報が変更される場合もあります。学会にご関心のある方はご自身で直接学会ホームページをリアルタイムで情報を確認するようにしてください)
また、読者の皆さんで介護や福祉分野の関係者の学びになるぜひおすすめの海外の学会情報がございましたら、日本介護福祉学会事務局(担当:古川) jarcw-post@as.bunken.co.jpまで情報提供をお願いします!

国際交流委員会(理事 古川和稔・綾部貴子)

① 2023 Conference on Aging & Social Change: Thirteenth Interdisciplinary

会期:9月14~15日※ハイブリッド型

開催国:アンコーナ(イタリア)

公式HP:<https://agingandsocialchange.com/2023-conferene>

学会の簡単なお紹介:今年のテーマは、“不平等の克服と持続可能性の促進:高齢化社会の課題”となっております。

② The Gerontological Society of America(GSA)2023 Annual Scientific Meeting

会期:11月8~12日※対面型

開催国:フロリダ(アメリカ)

公式HP: <https://www.gsa2023.org>

学会の簡単なお紹介:米国老年学会です。“老年学”“高齢者”“老い”等をキーワードにした学会で、医学、介護福祉、看護、心理、教育等の分野から発表されており、幅広い視点で学ぶことができます。

③IFSW Asia Pacific Scocialwork Conference2023

会期:11月5~7日※対面型

開催国:セブ(フィリピン)

公式HP: <https://www.ifsw.org/event/ifsw-asia-pacific-social-work-conference-2023/>

学会の簡単なお紹介:アジアパシフィックのソーシャルワーク学会です。今回のテーマはSDGsを意識した社会福祉の実践や教育等多様な内容となっております。

会費納入のお願い

本会は会員の皆様の会費により、運営しております。近年、会費未納により退会となる事例が問題となっております(会費を3年滞納された場合は、理事会の承認を経て退会処理となります)。

学会運営の健全化を導くうえでも、会員の皆様の会費の納入率の向上が必須です。どうぞ宜しくお願い致します。

正会員:9,000 円

学生会員:3,000 円

《会費振込口座》

◎郵便振替口座

00180-7-417389

加入者名:日本介護福祉学会

(他金融機関からのお振込みの場合)

〇一九(ゼロイチキュウ)店 当座 0417389

◎みずほ銀行 江戸川橋支店(545) 普通預金
口座番号:1213646 口座名義:日本介護福祉学会
(ニホンカイゴフクシガツカイ)

本会の活動資金の大部分は、会員の皆様の会費によって成り立っています。学会の円滑な運営のため、ご理解ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

▼お問い合わせ先▼

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本介護福祉学会 事務センター

TEL: 03-6824-9378, FAX: 03-5227-8631

E-mail: jarcw-post@bunken.co.jp

編集後記

生命に危険があるほどの暑さが年々増えています。加えてコロナ禍で免疫力が低下したことによって感染症も増えているとのこと。私もつい先日ウイルス性の腸炎になってしまい、苦しい状態でした。お仕事も色々とキャンセルをしてしまい、体調管理も大事な仕事だと改めて痛感しました。

そんな中、5月から新しい職場に移り、今は重度訪問介護など、障がいや難病の方の現場に入るようになりました。在宅の高齢者介護が長かった分、新しい発見や学びが多く、より福祉職としてのやりがいや社会の課題に気付かされる今日この頃。介護福祉士でありながら、制度の縦割りの中で働いていたのだと気づきます。

2023年も上半期を終えて、下半期。大会の開催も近づいており、何かと時の流れは早いものだと感じます。

皆さまもご体調に気をつけて、2023年の後半を過ごして参りましょう。

第10期広報委員会

理事 野田 由佳里

理事 堀 崇樹

評議員 午頭 潤子

編集後記 評議員 金山峰之